中 学 校

平 成 5 年 度

# 教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

道　　徳

東 京 都 教 育 委 員 会

平成５年度

# 教育研究員名簿（道徳）

| 分科会名 | 区市町村名 | 学校名 | 氏名 |
|---|---|---|---|
| 第一分科会 | 墨田 | 両国中学校 | ◎池　教子 |
| | 練馬 | 光が丘第一中学校 | 関口敬二 |
| | 葛飾 | 一之台中学校 | ○平内利光 |
| | 江戸川 | 清新第二中学校 | 保科敏彦 |
| | 立川 | 立川第二中学校 | 賞雅技子 |
| | 保谷 | ひばりが丘中学校 | 井上春好 |
| | 多摩 | 永山中学校 | 石川裕康 |
| 第二分科会 | 新宿 | 西戸山中学校 | 千葉一郎 |
| | 大田 | 御園中学校 | 栗村和弥 |
| | 世田谷 | 上祖師谷中学校 | ○滝澤雅彦 |
| | 豊島 | 第十中学校 | 田辺ますみ |
| | 荒川 | 日暮里中学校 | 鈴木秀明 |
| | 足立 | 谷中中学校 | 鈴木昭久 |
| | 府中 | 府中第四中学校 | 浅野　剛 |
| | 羽村 | 羽村第二中学校 | 井口寛隆 |

◎　世話人　　○副世話人

担当　教育庁指導部主任指導主事　　谷合明雄

研究主題

人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導

# 目　　次


Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　内容項目２－(5)「他に学ぶ広い心」についての指導（第１分科会） …… 3

1　主題設定の理由 …… 3

2　研究の内容と方法 …… 4

(1)　内容項目２－(5)のとらえ方 …… 4

(2)　生徒の実態と各学年のねらい …… 5

(3)　指導方法の工夫 …… 7

(4)　指導事例 …… 9

3　まとめ …… 12

Ⅲ　内容項目４－(1)「集団生活の向上」についての指導（第２分科会） …… 14

1　主題設定の理由 …… 14

2　研究の内容と方法 …… 15

(1)　内容項目４－(1)のとらえ方 …… 15

(2)　生徒の実態 …… 16

(3)　各学年の指導のねらい …… 18

(4)　指導方法の工夫 …… 19

(5)　指導事例 …… 20

3　まとめ …… 23

Ⅳ　まとめと今後の課題 …… 24

研究主題

人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導

# Ⅰ　研究主題設定の理由

道徳教育は人生をよりよく生きるための道徳性を育成し，生徒一人一人の人格の形成を図っていくことをねらいとしている。人は人とのかかわりの中で望ましい生き方や人間らしく生きようとする生き方を追求するものであるが，成熟化した現代社会は生徒達の人格形成にとって必ずしも良い環境とはいえず，むしろ多くの弊害を生み出している。

経済的繁栄の中で高度情報化社会が進展し，都市化に伴って地域社会が崩壊した。これらの社会変化は生徒の心身や生活に様々な影響を与えており，規範意識の低下や耐性の欠如，他者への思いやりや感謝の心の減退などの課題として現われてきている。また価値観が多様化するということは，個性が生かされることとしてとらえることもできるが，反面それは他者への無関心や自己中心性の表われとも受け留められ，心の荒廃にもつながる道徳的価値観の喪失を意味しているのである。この状況に対して，今日学校教育に強く求められていることは，人間らしい道徳性に支えられた生き方を生徒一人一人に自覚させる指導である。

中学生は心身両面の発達が著しく，他者との連帯を求めると同時に自我意識の高まりによって不安や動揺も激しく，他者との葛藤や大人への批判も増大する時期である。自己の独自性確立への模索を通して自分自身への生き方への関心が高まる時期である。このような時期をとらえて，人間としての生き方に対する生徒の考えを深めさせ，自己と他者との望ましい人間関係の中で自己実現を図らせるために，道徳の時間は大きな役割を持つものである。

上記の課題にこたえるために，道徳の時間の指導では，よりよい生き方を目指す指導の中で生徒の豊かな道徳性を養い，道徳的実践力を育成していくことに主眼を置く。しかし何よりもその根底には，常に人間尊重の精神を据えて，道徳性の内面的充実を図っていくことが重要であると考える。

以上のことから，研究主題を「人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導」と設定した。そして第一分科会は，主として他とのかかわりに関することに視点を置く内容項目２－(5)を，第二分科会は，主として集団や社会とのかかわりに関することに視点を置く内容項目４－(1)をそれぞれ取り上げ，内容項目のとらえ方，生徒の実態の把握，資料の検討，指導過程や指導方法の工夫などについて研究することを通して，研究主題に迫ろうと考えたのである。

## Ⅱ　内容項目２－(5)「他に学ぶ広い心」についての指導（第１分科会）

### 1.　主題設定の理由

人間は一人では生きられず他人とのかかわりなしには存在し得ない。人にはそれぞれ，ものの見方や考え方があることを理解し，学ぶことによって，これまで知りえなかった知恵を受け継ぎ，自らの人生をより一層豊かにすることができる。自分にとってはまったく思いもかけない見方や考え方があることを知ることで，他者のなかに異なる自分を発見し，自分のなかに他者の立場を理解しようとする心が育つのである。そこに，自分の個性を知り，他者の個性を尊重する相互理解が生まれるのである。しかし，現代の物質万能主義的社会の風潮を顧みるとき，物に毒され心が育たない環境となりつつあると考える。また，価値観の多様化はますます人のふれあいを希薄なものにしているともいわれる。

このような社会の中では，ややもすると自己本位にものごとを考えがちな傾向が見られる。その結果，他者への思いやりに欠けたり，考え方や見方が異なると敵対視してしまったりすることがある。人間は相互の心の交流や信頼関係，さらには，他に学ぼうとする気持ちなくしては人間としての成長はあり得ないのである。そこで，人間には，それぞれ個性や立場があり，異なったものの見方，考え方があることを理解し，他者から学ぶ広い心をもつことが大切となる。また，自他の過ちや失敗を謙虚に受けとめる相互理解や相互信頼を学び，今後の自分のよりよい生き方を見つめ，考えることに生かしていく必要がある。

中学生の時期は身体的にも精神的にも成長発達が著しい。しかし，自分の立場や考えを強く主張したり，固執したりする傾向が強くなり，他から学ぼうとする謙虚さや異なった考え方を理解する心に欠け，家族や友人の間にも意見の対立や摩擦が生じやすい。

このように，ものの見方，考え方が人によってそれぞれ異なることを十分に理解し，自己の内面を見つめ，自分自身について反省し，今後の生活に生かして自己を高めようとする態度を身につけることが必要である。生徒がしだいに自我を確立していく中で自分を振り返り，自らの不完全さを知り，また他の人の言うことに謙虚に耳を傾け，積極的に他に学ぶ態度を育てるとともに，自他の個性や立場を尊重し，安易に妥協することなく協力し合う広い心を身につけさせたいと考える。

以上のことから，第１分科会では「人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導」として，内容項目２－(5)「他に学ぶ広い心」を取り上げ，内容項目のとらえ方，生徒の実態，資料の検討，指導方法・指導過程の工夫等の研究を進めることにした。

## 2. 研究の内容と方法

### (1) 内容項目２－(5)のとらえ方

内容項目２－(5)は，「それぞれの個性や立場を尊重し，いろいろなものの見方や考え方があることを理解して，謙虚に他に学ぶ広い心をもつようにする。」（中学校学習指導要領道徳）である。この項目は，他者との関係のなかで自己のよりよい生き方を考えていくという視点２「主として他の人とのかかわりに関すること」の一つとして位置付けられており，ここでいう「広い心」とは，安易に妥協することではなく，他者のよさを信じる寛容の姿勢をもちながら，謙虚に他に学んでいこうということが主旨である。

中学生ともなると，身体的・精神的発達が著しくなり，それにともなって自我に目覚め，さまざまな物事に対して自分なりの価値観をもち，それを強く主張するようになる。しかし，生活経験が浅く，社会性も希薄である彼らの考えはとかく独善的になりがちで，自分の立場や考え方のみに固執してしまう傾向がある。その結果，他者の立場や気持ちを理解しようとする姿勢が薄れ，異なる意見や考え方を一方的に非難しようとする面もあり，周囲との意見の対立や摩擦も生じやすくなる。

人は一人では生きていけない存在であり，本来的に他者とのかかわりの中で，自らを向上させていくものである。よって，自己を向上させていく一つの鍵は，他者と接する人間社会そのものにあることを深く認識しなくてはならない。つまり，人にはいろいろなものの見方や考え方があるという現実を認め，それを尊重していく姿勢をもったとき，はじめて自己を客観的に見つめる目を持つことができるのである。その後に，人は自己を客観視するなかで自らの足らざるを知り，他者の意見や考えを謙虚に受け入れて向上していこうとする。それが，結果としてよりよい自己実現につながっていくのである。

以上，述べたことを構造的に表してみると図１のようになる。

図１

(2) 生徒の実態と各学年のねらい

「個性を生かすこと」,「自他を尊重すること」, さらには「他に学ぶ広い心」について, 中学生の実態を把握し実際の指導に生かすために, アンケートによる実態調査を実施した。

調査期間：平成5年9月上旬

調査地域：葛飾, 江戸川, 墨田, 練馬, 保谷, 立川, 多摩

調査人数：1年生 246名, 2年生 243名, 3年生 239名　計 728名

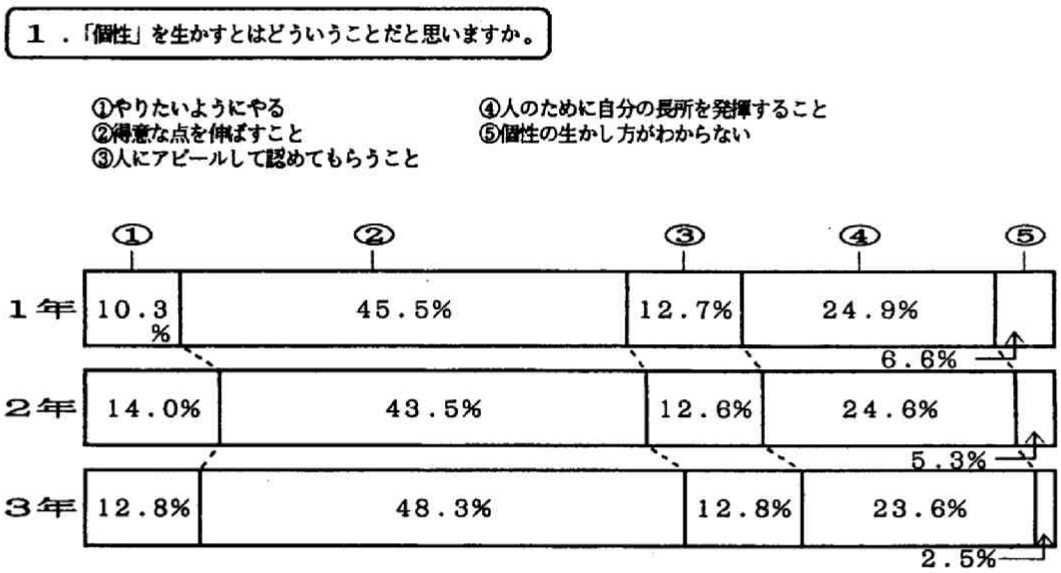
アンケート項目については, それぞれ下記のような視点で質問内容を設定した。

〈質問1〉 「個性」という言葉のイメージとその生かし方をどのようにとらえているか。

〈質問2〉 一般的な意味で,「自他の違い」をどのようにとらえているか。

〈質問3〉 「相手を尊重する」ということを具体的にどのようにとらえているか。

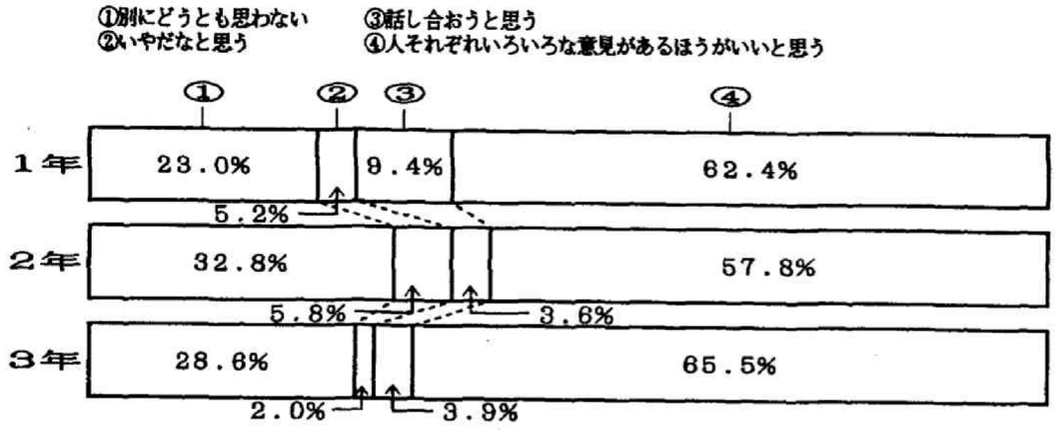
〈質問4・5〉 他との対立, 他から注意を受けるというような, 具体的に他とかかわり合う場面を設定し,「他に学ぶ広い心」を問う。




この結果から, 自我をしだいに確立していく中学生の時期では, 個性を生かすとは, 自分自身の得意な点を伸ばすことと約半数近くの生徒が考えていることがわかる。

2年生では①やりたいようにやるを回答している割合がやや多いが, これは自我の芽生えと同時に他人との対立も生れ, 自分を発揮しようとする欲求が高まっていると考えられる。また, ④のように人のためにと考えている生徒が約1/4おり, これは, 人とのかかわりの中で自分自身の個性を埋没させるのではなく, 積極的に生かそうとする意欲のあらわれだと解釈することができる。

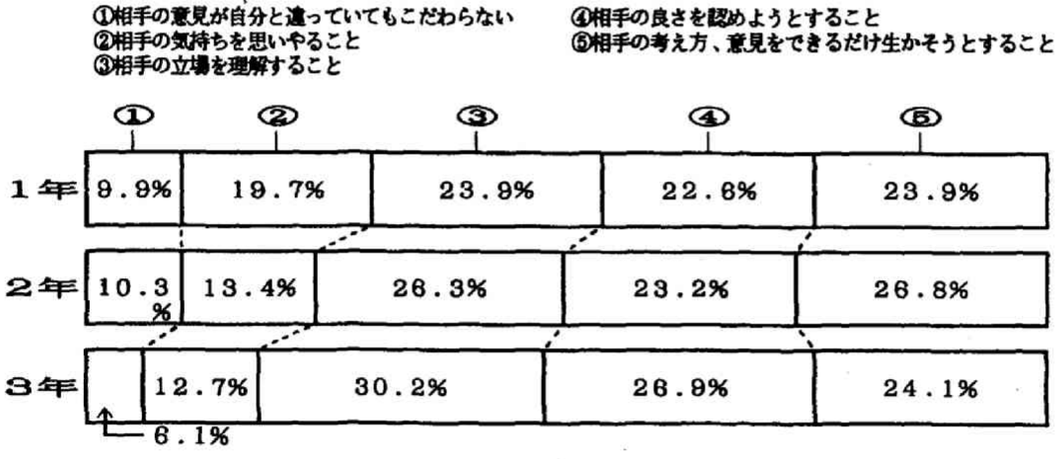
**2．自分とものの見方や考え方の違う人のことをどう思いますか。**




この質問では④を選ぶことが最も良い段階と考えたが，①②のように，「相手に対して積極的なかかわりを持とうとしない生徒」の割合も把握したかった。

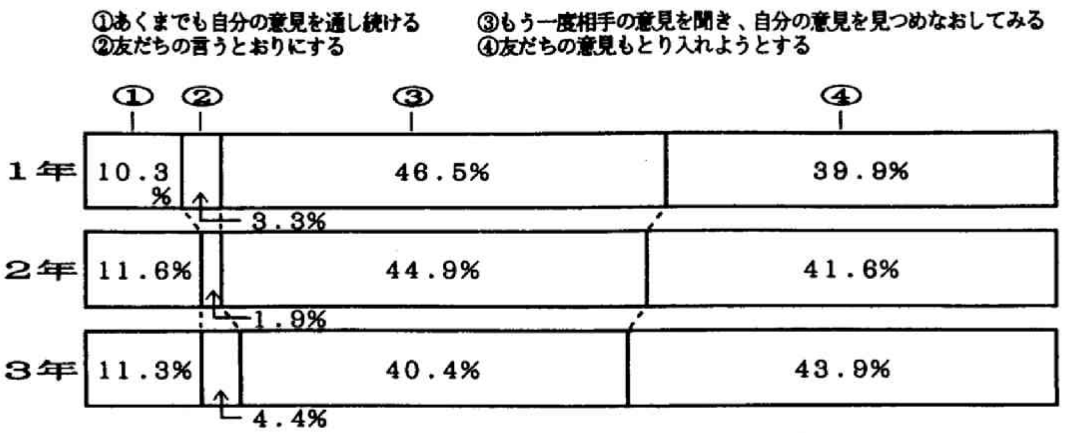
この結果から，約2/3近くの生徒が④のように人によっていろいろな見方や考え方があることを認めていることがわかる。また，2年生に比べ3年生では，④の割合が増え①②がトータルで減る。このことは，3年生になると他者を認めようとする傾向が強まるものと考えられる。

**3．相手を尊重するということは、どういうことだと思いますか。**



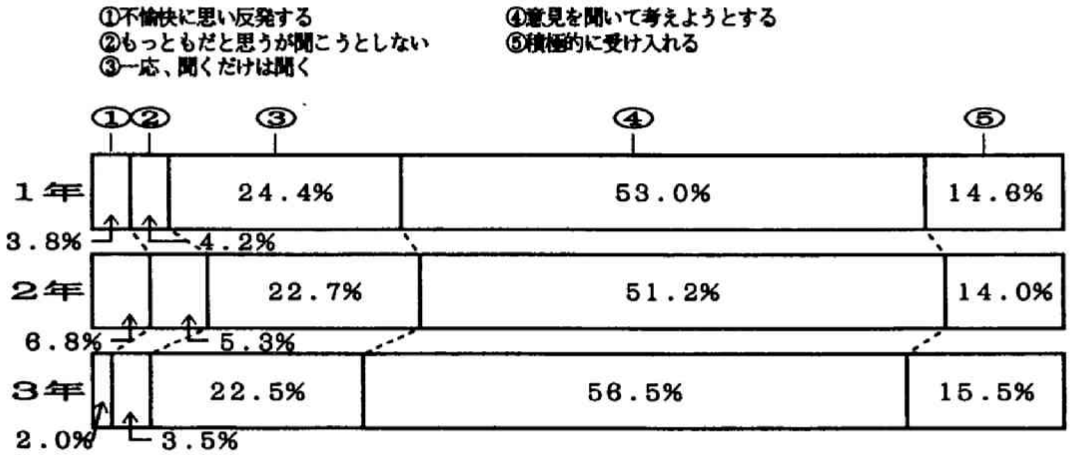

学年が上がるにつれて②が減り③④⑤が増えている。これは，成長するにつれ，いろいろな経験を重ね，相手を理解しようとすることが，相手を尊重することだと受けとめている傾向が強まった結果と考えられる。

**4．友だちと意見がくい違った時、あなたはどうしますか。**




8割以上の生徒が③と④を選択しているが，各学年とも1割の生徒が①のようにあくまでも自分の意見を変えずに通し続けると考えている。このことは，質問1・2のように客観的な質問とは違い，「あなたはどうしますか」という問に対して，中学生の時期には自分自身の考えに良くも悪くも固執する傾向が少なからずあることを表していると考えられる。

**5．あなたのために注意された時、どうしますか。**




上の5の質問では，約9割以上の生徒が③④⑤を選んでおり，他から学びとろうという気持ちは持っているようである。しかし，2年生は①②を選ぶ生徒の割合がわずかに増えている。これは，質問2・4と対応して，自己を主張する傾向が強い時期であることが表れていると考えられる。

以上のような実態把握に基づき，各学年の指導のねらいを次のように設定した。

第１学年　　自分と異なる個性や立場があることを知り，それを尊重する心情を養う。

第２学年　　「自分本位」の考え方を克服し，他人の様々なものの見方や考え方に学ぼうとする意欲を高める。

第３学年　　積極的に他の人とかかわる中で，他人の個性や立場を理解し，他に学ぶ広い心と寛容な態度を育てる。

(3)　指導方法の工夫

①　資料選定の観点

第１分科会では，内容項目２－(5)の指導に供する資料を次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア)　教師自身が感動し，心魅かれる資料。

(イ)　生徒が自ら考え，自分の問題としてとらえ，道徳的判断力を高める手掛かりとなる資料。

(ウ)　人とのかかわりの中で自他を尊重すること，他に学ぶ広い心をもつことで，よりよい人生が開かれていくという意識付けの契機となる資料。

上記の視点にたって資料を収集し，検討した結果，Ｔ社「明日をひらく２」所収の「なみだ」を選定した。

②　授業の構想

内容項目２－(5)は，「主として他の人とのかかわりに関すること」の中に示されている項目である。他の人とのかかわりとは，その人の個性と立場双方に目を向けて勘案すべきものであり，中学生としての不安定な要因をその心の内面に抱えながら急速に自我を確立していく生徒の，様々な人間関係を含んでいることを教師側はとらえていなければならない。その点で，この項目の内容は，道徳の時間の指導だけでなく，学校教育における他の教育活動での道徳教育と特に密接に関連させながら指導していく必要がある。

また，上記の観点に基づいた資料選定が難しいこと，本内容項目は他の様々な内容項目との関連も深いことから焦点化した授業展開が難しいこと，さらに，指導に当たっては，生徒を受容する教師の姿勢が大変重要な要素となってくることなどが明らかになってきた。

③　資料の提示及び指導の工夫

資料を検討していく過程で，原文からの読取りに難しい点があることを考慮して一部を削除し，題名も『けが』と変更した。また，内容項目２－(5)は，他者とのかかわり……を意味するということと，広い心を多面的にとらえさせるために，単に主人公からだけでなく，逆の立場からの見方を紹介する文を作成し提示した。また，原文ではＳ君となってい

たものを，より親しみやすくするため翔君と改めた。さらに，この項目は，他の内容項目と関連が深いので，ねらいをしっかり設定して指導していく必要がある。

(ア) 導入

教師の体験なども交えながら，生徒自身の過去の体験を振り返らせ，そのときの気持ちなども大切にしながら資料に入った。また，これから読む『けが』の事の発端にも触れながら資料に興味をもたせた。

(イ) 展開

主人公の気持ちに触れながらも，逆の立場の翔君にもスポットを当てて読ませるようにした。授業の全体を通して，生徒の意見や考えを多く聞きあえるように工夫し，生徒自らの内に広い心をもっていることを生徒自身に気付かせるよう配慮した。

(ウ) 終末

ここまでに自分で書いた感想文を見ながら，受け取る側の気持ちのもちようで同じことが違って見えている部分がないかを見つけ，文章にまとめさせた。

④ 資料の内容

本資料は，学校内の美化活動中に起きた不慮の事故から，被害者（和美）と加害者（翔）の心の動きを描いたものである。

○ 和美の作文……被害者の立場で書かれた文章。和美と翔は，放課後の美化活動をしていて翔がドアを動かした瞬間和美の指を挟んでしまった。故意ではなく，二人とも一生懸命やっているときの事故だった。和美は病院へ行き，何針か縫うけがだった。翔は母親とともに和美宅に謝罪に行く。そこで，翔の母親が涙して和美に謝る。翔も謝る気持ちはあるが黙っていた。翌日和美は，翔に対して思いやりの心をもち行動する。

○ 翔の作文（その１）……加害者の立場から書かれた文章。翔が事故を起こしたその瞬間の動揺から，謝罪しようという気持ちになるまでの心の移り変わりを示した。

○ 翔の作文（その２）……翔は，加害者であることは明白なのだが，自分は故意ではないという気持ちから，相手の対応の仕方へと責任転嫁していく。翔の心の動きを生徒たちに感じとらせ，その気持ちの動きから心の広さ，狭さを考えさせる。

内容が，日常生活で起きやすい事件であるため，考えやすい資料であった。

(4) 指導事例（第２学年）

① 主題名　他に学ぶ広い心（内容項目２－(5)）

② 資料名 「けが」(生徒作文) ――「なみだ」(T社「明日をひらく2」所集) を一部改作，また，これを基にした翔の反省文（自作資料）

③ 主題設定の理由

人は，家族や地域社会などの身近かな集団から，学校・会社などの一種の契約により結ばれた集団などの中で，様々な人とのかかわりの中で生きている。人はそんな人間関係の中で，いろいろな立場にたってものごとを見たり考えたりして成長していくのである。こうした中にあって，特に中学生という発達段階では，ともすれば感情的なかかわりから抜け出せずに消極的になってものの見方や考え方が狭くなったり，非社会的な行動や反社会的行動などに走ってしまうこともある。

中学2年生という時期は，自分らしさ（identity）を求め出す時期と言われているが，自分らしさを模索している段階では，それを表現する方法もよくわからない場合が多い。また，今まで学んだ知識や生活経験と，これから求めようとする自分らしさとの間に矛盾を感じたりする。その結果，自他の言動に苛立ちを覚えたり，自己本位の考え方や行動をとったり，人間関係による負担を軽くするため相互に無関心を装うことで，精神的な安定を求めようとしたりする。

こうした時期にこそ，自分一人の考え方を脱して他の人の考えや行動に学ぶ，いわゆる他に学ぶ広い心の指導が重要と考え，本主題を設定した。

④ ねらい

自己本位の考え方を克服し，他の人の様々なものの見方や考え方に学ぼうとする意欲を高める。

⑤ 指導過程

| | 学習活動及び主な発問 | 予想される生徒の反応 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 導入 | 1 昔経験したけがのことを話し，導入とする。 | | ・和やかな雰囲気が出るようにする。 |
| 展開 | 2『けが』を読み翔の心の動きについて考え，発表する。<br>①翔は，当初この事件に対して，どのように感じ，考えていたか。 | ◦悪い。悪気があったわけではないが，すまないと思っている。<br>◦ワザとではないのになぜ | ・資料を読んで評論的にならないようにする。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 展<br><br>開 | 3翔が書いた文（その１）を読んで考える。<br>②翔は，どのように考えを深めていったか。<br><br>4翔の母の涙の意味を考える。<br>③翔の母の涙は，二人の気持ちにどんな影響を与えたか。<br><br>5翔が書いた文（その２）を読んで考える。<br>④この時の翔が自分の事を正当化していく気持ちをどう思うか。 | 謝らなくてはならないのか。<br>◦痛かっただろうな。<br>◦わざとではなくても相手の気持ちを考えている。<br>◦最初は，一応と言っているが後でちゃんと反省した。<br>◦和美さんにすぐ謝ればいいのに。<br><br>◦和美には，広い心がありそれを気付かせるきっかけになった。<br>◦翔は，相手の心を考えるようになった。<br>◦自分の事を棚にあげ声を掛けてもらおうなんて甘い。<br>◦翔の気持ちもわかる。<br>◦翔の母がかわいそう。 | ・見方を変えた心の動きを明確にさせる。<br>・いろいろな意見があることを経験させるために，多くの生徒に意見を聞く。<br><br>・この涙を素直に受入れられた心を強調。<br><br>・この作文で心がせまい感じを受けたか。 |
| 終<br><br>末 | 6感想文を読み返して，考えを整理しまとめる。<br>⑤ここまでに皆が考えて書いた感想文を読み返し，最初の見方と変わっている部分がないか。探してみよう。 | ◦心の持ちようでずいぶん見方が変わり，人との関係がスムースになる事もある。 | ・自分自身の中にも柔軟な広い心があることに気付かせる。<br>・皆の意見を聞いていろいろな考え方がある事に気付いたか。 |

⑥ 評価の観点

(ア) 広い心についての理解を深め様々な見方・考え方があることを実感できたか。

(イ) 資料を改作したことや，サブ資料を２編用意して提示したことは，効果的であったか。

⑦ 授業の概要および研究協議会のまとめ

教師自身の体験談を基に生徒たちの体験を想起させてから資料の黙読に入った。資料は身

近な内容のため，けがの状況を説明するだけで十分読み取れたようである。個々の生徒に自分の考えを発表させ，それを聞き合いながらさらに考えを深めていく展開をしていた。

(ア) 自評

- 広い心がとても抽象的で分かりにくいと考え，広い心・狭い心が感覚的にとらえられるように翔の作文2つを用意したが，読みもの資料が3種類あるのは多かったようだ。
- 生徒自身の考えを記録し，発言しやすくするため書かせる工夫をしたので発表しやすかったようである。

(イ) 研究協議および改善点

- 登場人物の心情を汲み取りやすい資料であった。
- 和美と翔のどちらかに焦点をもっと絞ったほうが良かった。
- 生徒と教師が発言する中で，いろいろな見方や考え方を知ることができて良かった。
- 生徒が自分の考えを十分に発表できたが，生徒からでた意見を他の生徒たちに考えさせても良かったのではないか。
- 言語事項や文章に即して進めていくのは国語の授業であり，文章の部分に着目して考えたり，資料を通して得られた心情の深まりを基に進めていくのが道徳の授業である。
- 翔の文を対比して読み取らせる時，翔の素直な気持ちを述べたものだということを明らかにする方が，生徒達に分かりやすかったのではないか。

研究協議を通して以上のような意見が出た。

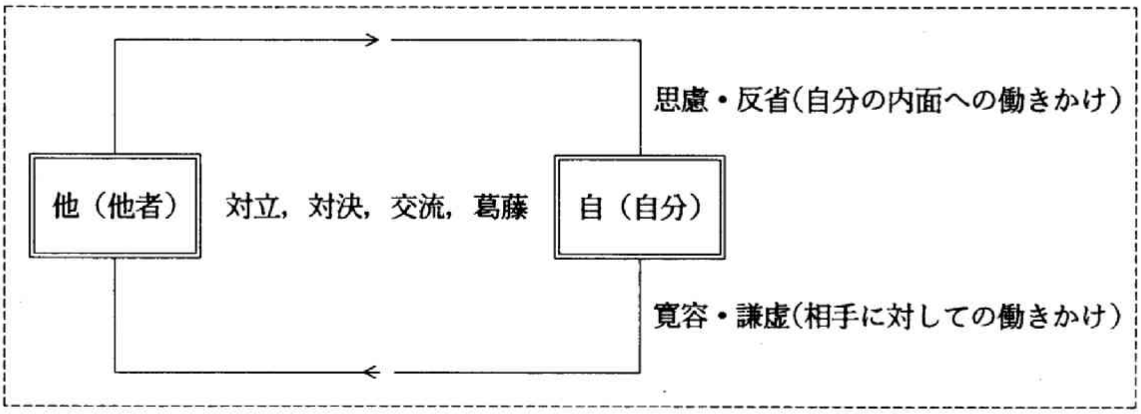
## 3. まとめ

第1分科会では，内容項目2－(5)「それぞれの個性や立場を尊重し，いろいろなものの見方や考え方があることを理解して，謙虚に他に学ぶ広い心をもつようにする。」について，研究を進めてきた。

人間は有限な存在であり，それゆえに，よりよく生きていこうと願いながらも自分の思いどおりにはならず，悩み苦しむことが多い。このことを，人間存在の根源に目を向けて自覚するとき，自分だけでなく他の人々もみな同じ人間だと理解することができるのである。

人間は，自分と同じような見方・考え方をする者の方が話し易いという傾向があるので，自分と違う考え方については，他の人とよほど積極的にかかわりを持とうとしないとそれを理解するための時と場を失うこととなる。その時と場とは，一つの物事の処理を巡って，その価値とか意味とかについて，自分とはまったく異なるとらえ方を他者がして，自分と対立，

対決，あるいは交流するときに生じてくる。その際，自分の心の内面に生じる葛藤は，次の二つのことがらを自分に知らせてくれるのである。一つは，その他者が，自分とは異なった立場にたって異なった見方をしているということ。もう一つのことは，その他者が自分の生きている空間とは異なった世界を生きているということである。そこで，他者と自分とを統合する架け橋として２－(5)の全体構造を次の図のようにとらえ，考えることとした。




図のように，他者とのかかわりのなかで，自分の内面への働きかけと他者に対しての働きかけが統合された時，初めて自ら積極的に「他に学ぶ広い心」が持てるのである。

さて，研究を進めるに当たっては，まず，より深く生徒の実態を把握するため，アンケート調査を実施した。結果を考察してみると，現在の中学生は，高学年になるにつれて「他者とのかかわりを避ける，他者を傷付けたくない，自己処理をしている」，さらに「妥協する，迎合する，抑制する」などの実態があることが分かった。したがって，生徒の認識としては，「他に学ぶ」までには至っていないことのほうが，むしろ自然ではないかと考えられる。「他に学ぶ」学び方としては，「他者の声に耳を傾ける，他者を尊重する」，あるいは「聞き取る，受け止める，考える」，また「理解する，目覚める，気付く，発見する」さらに時間的な経過を考慮すれば「後からわかる」など，さまざまな時と場が考えられる。そこで，親密な人間関係を前提とした自他のかかわりの中で，「他に学ぶ」までの過程の大切さを自覚させる指導が重要な課題となってくるのである。

資料に関しては，ねらいどおりの資料がなかなか見つからず苦労した。自作資料を含めて協議した結果Ｔ社の資料集より「なみだ」を選定し，授業を通して深めてきた。

内容項目２－(5)は，他の多くの項目と関連があり，扱いを一つ誤るとねらいが変わってしまうことが今後の課題として残った。研究を進めて行くにつれて，改めてこの項目の内容が，人間としての生き方に深くかかわり，いかに奥深いものがあるかを痛感させられた。

## Ⅲ　内容項目４－(1)「集団生活の向上」についての指導（第２分科会）

### 1.　主題設定の理由

人間は，誕生以来その成長の過程に応じて様々な集団に属して生活をする。しかし，単に多数の人間の集合体をもって集団というのであったり，自己の役割を果たすのみで成員というのでは望ましい集団とは言えない。望ましい集団とは，その集団を構成する一人一人の個性が生かされ，成員が自分の属する集団の在り方を十分に理解し，主体的に自己の役割と責任を果たす集団のことである。また，成員が相互に理解し合い，協力し合うことが個々の成員を向上させ，集団を向上させることにつながるのである。

現代の中学生は，協力して作業を行う集団や，活気のある集団を望んでいるものの，この時期までに経験する集団は，家族，あるいは気の合った仲間集団であるために，共通の目標で結びついた集団や，広い範囲の社会集団に対して帰属意識を持つに至っていない。

また，この時期は自我の発達に伴い自分の考えをもつ時期であり，善悪の判断もある程度できるようになる。しかし，集団全体への影響や迷惑を省みることのない自己中心的な考えが先行し，集団においても限られた自己の役割を果たすことのみ腐心し，協力して取り組むことができない。集団の中で必要最小限の役割を果たすだけで，自分には直接責任がないことに関しては「関係ない」と協力しない傾向がある。

協力することの必要性を観念的には理解していても「めんどうくさい」「早く帰りたい」「あまりしたくない」など，役割や責任から逃れようとする言動が目立つ。また，学年が上がるにつれ，個人的な都合と集団の中での役割の間で葛藤が生じ，意欲が実践につながらない場合もある。

中学生の時期は，所属する集団が，家族や気の合った仲間集団に加えて，役割集団や広範囲の社会集団へ拡大する時期である。また，心身の発達の個人差も大きく，発達段階も多様である。指導にあたっては，所属する集団の意義を理解させた上で，集団において異なる意見や立場をも尊重する態度を育て，お互いの個性を生かしつつ協力して取り組み，主体的に自己の役割を果たそうとする意欲と態度を育てることが大切である。

以上のことから，第２分科会では「人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導」として，内容項目４－(1)「集団生活の向上」を取り上げ，内容項目のとらえ方，生徒の実態，資料の検討，指導方法などについて研究を進めることにした。

## 2. 研究の内容と方法

### (1) 内容項目4－(1)のとらえ方

内容項目4－(1)は，「自己が属する様々な集団についての理解を深め，役割と責任を自覚し，協力し合って集団生活の向上に努める。」（中学校学習指導要領　道徳）である。

この内容に即して現在の中学生の実態を探ってみると，集団の意義や個人の役割の大切さについては観念的には理解しているが，具体的に行動に移す場面では，周りの誰かがやってくれればよいという安易な気持ちに流され仕事を怠けたり，自己中心的な考えが先行し集団全体のことを見失ったりして，結果的には楽な仕事を求める傾向になりがちである。集団生活を向上させることが，生徒一人一人の生活の向上や人間的な成長につながっていくということが理解できていない。そのために，実践的な活動において協力し合うことができにくくなっている。集団をより向上させて，成員を成長させるためには，自己の役割を果たしつつ成員が「協力」していくことが大切となるのである。

集団を船に，集団の成員を乗組員に例えてこの実態をとらえてみると，集団が機能するということは船が前進することであり，島は集団にとって目標の一つである。船が島に到達するためには，相互理解のもとに乗組員が規則を守り協力することが大切である。船の前進を阻む向かい風は，乗組員の心にある利己心や狭い仲間意識である。様々な個性を持つ乗組員が集団の意義を理解し，それぞれの役割と責任を自覚し，個性を発揮しながら，協力し合ってこそ船は安定して航行できるのである。嵐に遭遇することもあるだろうが，復元力によって乗り越えることができる。この復元力は，乗組員の「協力」なくしては生まれないものである。以上，述べてきたことを構造的に表すと，図2のようになる。

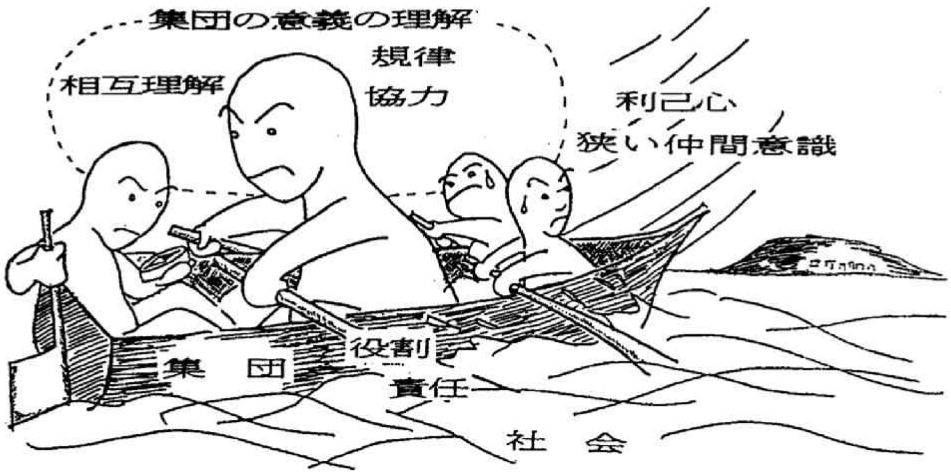



図2

(2) 生徒の実態

研究を進めるに当たり，まず「集団生活」にかかわる生徒の実態を調査した。アンケート項目の設定に当たっては，自己の属する様々な集団についてどのような意識を持ち，どのような行動をとるのかという視点から検討した。その結果「家族」「学級」「学校」「地域」「郷土」等について調査することが適切であると判断した。

調査した中から結果に特徴のあるものについて考察してみた。

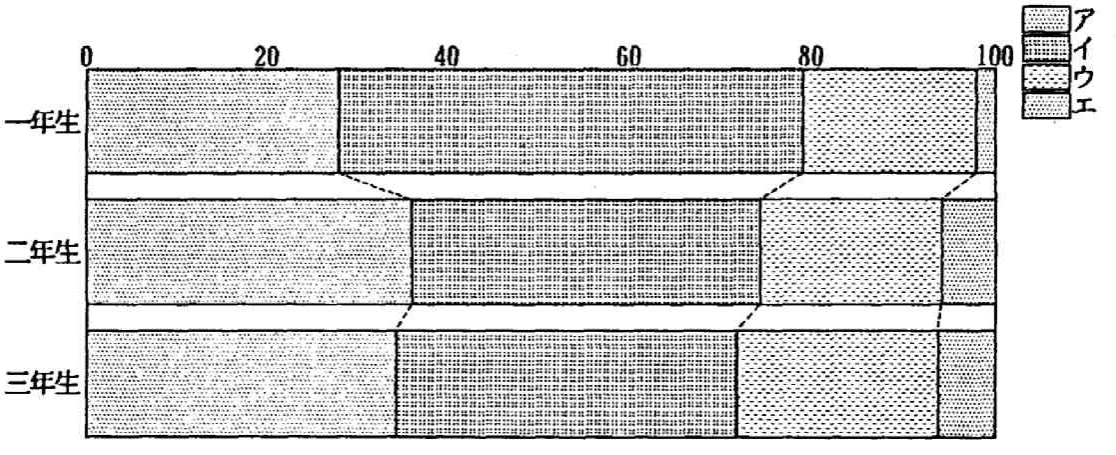
＜設問１＞新年度となり，新しい学級での委員決めが行われた。ところが，図書委員のなり手がなく友人に推薦されてしまい，図書委員になってしまった。さて……

(ア) 推薦されたのだから，頑張ってやってみよう。

(イ) 他の人がいなかったのだから，我慢してやってみよう。

(ウ) 仕方がないので，適当にやろう。

(エ) やりたくなかったので，サボってしまおう。




この調査結果から，学年が上がるにつれて，委員会のようなクラスや学校の中で任せられた仕事や役割に対して，自分としては希望してないので不本意ではあるが，責任をもち頑張って遂行しようとする者が増えている。しかし，１年生の段階ではまだ自己中心的な考えが強く，クラスや学校の中での自分の役割を自覚できずにいる者が比較的多いと考えられる。

＜設問２＞学校の廊下を歩いているとプリントがまるめられて落ちていました。

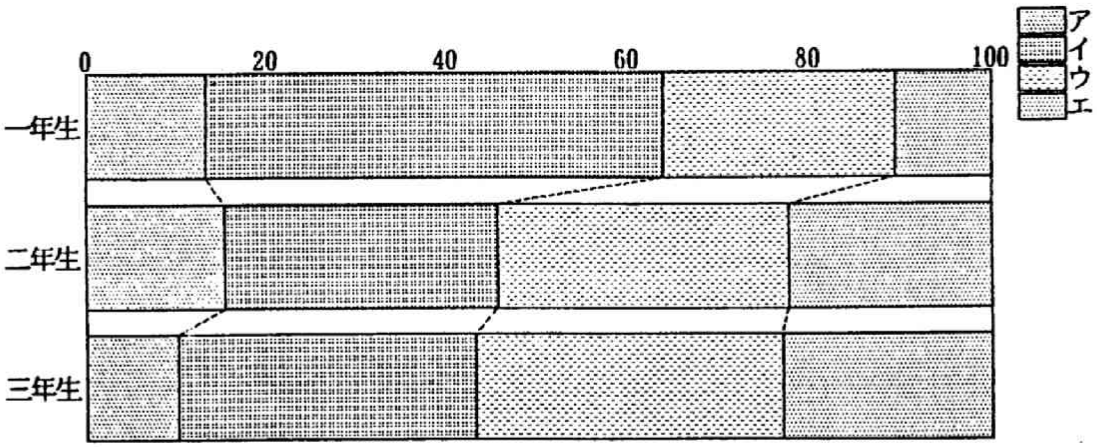
その時あなただったら？

(ア) 自分が出したゴミではないが，みんなの学校だと思って，気持ち良くゴミを拾う。

(イ) 困った人がいるなと思って，仕方なくゴミを拾う。

(ウ) 誰だ，こんな所に捨てたのは，と思いながら通り過ぎる。

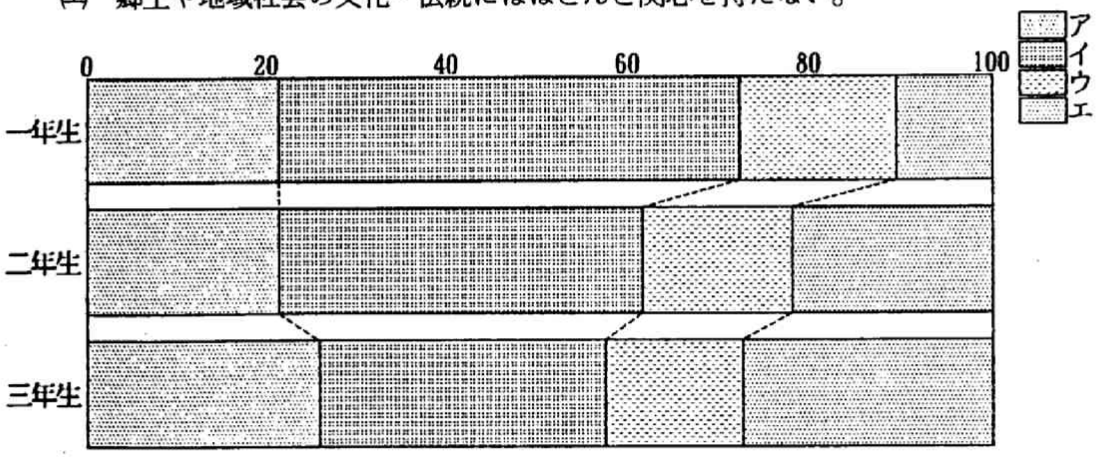
(エ) 関係ないので，気にせずに通り過ぎる。




この調査結果では，学年が上がるにつれてゴミを拾う生徒が減り，拾わない生徒が増えている。しかし，学校生活での状況を観察すると，「ゴミを拾う」を選んだ生徒も実際にはゴミを拾わないことが多い。このことから観念的に理解はしているが，実際の行動には結びつかず道徳的実践力が育っていないことがわかる。

＜設問３＞自分の住む郷土・国について，どのように思っていますか。

(ア) 郷土や地域社会の文化・伝統を尊重し，郷土や地域社会を大切にする心を持つ。
(イ) 郷土や地域社会の文化・伝統に親しむが，郷土や地域社会を大切にする心は十分ではない。
(ウ) 郷土や地域社会の文化・伝統をあまり大切にせず，郷土や地域社会を大切にする心も不十分である。
(エ) 郷土や地域社会の文化・伝統にはほとんど関心を持たない。




この調査結果から，学年が上がるにつれて(ア)を選択した生徒が増えるとともに(エ)を選択した生徒も増えている。学習によって郷土や地域社会の文化・伝統についての理解が深まるとともに，郷土や地域社会に対する意識が明確になった結果と考えられる。

（調査区域　大田 世田谷 府中）（調 査 数　1年生 210人 2年生 210人 3年生 218人　合計 638人）

(3) 各学年の指導のねらい

—第1学年—

1年生では，集団の意義と個人の役割を果たすことの大切さについて観念的には理解している。しかし，この時期は自我の発達に伴い自分の考えを持つが，それは自己中心的になりがちである。例えば，他人が責任を果たさないことを非難するが，自分の責任は果たそうとしない。生徒のこうした態度によって，学級内の諸問題が起こることが多い。学級内の係活動という身近な問題から，それぞれの役割や責任を自覚させ，協力し合って集団生活の向上を目指す心情を育てたい。

資料例　「ぼくのふんがい」　道徳の学習　S社

—第2学年—

2年生になると，気の合った仲間集団を作り，その集団にとらわれる傾向が強くなる。その結果，集団全体への影響や迷惑を省みることのないわがままな言動が見られる場合がある。そこで，成員が規律を守り，相互に理解し合うことによって利己心や狭い仲間意識を克服し，集団生活を向上させようとする意欲を高めたい。

資料例　「きみょうなばつ」　明日をひらく　T社

—第3学年—

3年生の時期は，社会的視野が広がり，自己の所属する様々な集団に対する帰属意識が強くなっていく。また，自分の生き方とのかかわりから，集団に対する理解も深まりを増してくる。こうした中で，今までの役割や責任に対する考え方から一歩進んで，その集団に対し自ら進んでかかわり，集団の中で一人一人の個性を生かしながら自己の役割と責任を果たしていく態度を育てたい。

資料例　「相手の立場を考える」　道しるべ　S社

以上のような考察から各学年のねらいを次のように設定した。

第1学年　所属する集団の意義と，個人の果たすべき役割や責任を自覚し，協力し合って集団生活の向上に努めようとする心情を養う。

第2学年　規律を守り相互理解を深めながら，利己心や狭い仲間意識を克服し，集団生活の向上に努めようとする意欲を高める。

第3学年　様々な集団に対する理解を深め，一人一人の個性を生かしながら進んで役割や責任を果たし，集団生活の向上に努めようとする態度を育てる。

(4) 指導方法の工夫

① 資料選定の観点

第2分科会では，内容項目4－(1)の指導に供する資料を次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア) 社会生活に何が大切であるかを考えさせる資料。

(イ) その集団の意義や，集団の構成員の役割や責任について理解できる資料。

(ウ) その集団にとって，集団生活が向上するとはどういうことなのかがわかりやすい資料。

この観点からいくつかの資料を収集・検討した結果，生徒の自由な発想や思考が深まるものとして，極北探検船の乗組員の集団生活に取材した「きみょうなばつ」を選定した。この資料は，生徒の身近な生活からは離れた場面構成ではあるが，生徒が思考を発展させ，興味や関心を持って取り組めるような，人間としてのよりよい生き方に結びつく深みのある葛藤資料である。

② 資料提示の工夫

この資料のポイントである「きまりを破った人への最大のばつとは，真っ先に帰ってもらうこと」であるということを強く印象付けるために，資料を二つに分割提示するという方法をとった。「最大のばつとは何だろう。」というところまでの資料を提示し，ここで生徒に十分考えさせ，議論させ，発表させた上で，資料の後半を提示することとした。

③ 指導過程の工夫

(ア) 導入

資料の持つ発展性，意外性を際立たせるため，本時のねらいを生徒に意識させないような導入を工夫した。地図帳によって北極海に思いを馳せさせ，そこで探検船が遭難したらどうなるかに生徒の気持ちを向けさせることで，生徒に興味・関心を持たせるよう配慮した。

(イ) 展開

生徒が，状況をよりリアルに思い浮かべることができるように，範読の中で解説を加えるようにした。また，生徒どうしが考えを深め合えるように，班での話し合いや発表の時間と場面を多く取った。さらに，資料の後半の提示については，一人一人の心に「最大のばつ」を強く印象づけるために，静かに資料と向き合わせるよう心がけた。

(ウ) 終末

授業を通して考えたことを書き留めさせるようにした。この時，生徒の思考が深まるように，時間内に書き終えない場合には，後日提出するよう，時間の余裕を与えた。

④　資料の概要

ソ連の極北探検船チェリュスキン号に起こった実話をもとにしたものである。チェリュスキン号が氷の圧力で沈没してから，百余名の乗組員が救助されるまで，氷上でテント生活をする。その困難な状況の中で，一人一人の隊員が，集団全体のためにどのような行動をとるべきかについて考える資料である。

(5)　指導事例（第２学年）

①　主題名　役割と責任　（内容項目４－(1)）

規律を守り，利己心や狭い仲間意識を克服し，協力し合って集団生活の向上に努める。

②　資料名　「きみょうなばつ」

桑原正雄作「チェリュスキン号の人々」による　（「明日をひらく２」Ｔ社）

③　主題設定の理由

人は家族のような身近な集団から，会社のような高度に役割分化が進んだ集団まで，様々な集団に属しながら生活している。中学生の時期は，自我が著しく発達する時期であるため，自分の考えを持ち，行動しようとするが，まだ自分本位の考え方をしたり，奉仕の精神や集団の成員としての責任感・連帯感に欠けることが多い。このような中学生が最も好む集団は，気の合った仲間集団であることが多い。そこでは集団の中での心地よさを維持することが目的となり，集団の向上が目的とならない場合が見られる。従ってそうした集団では，明確な役割も責任も存在しない。

しかし，中学校生活の中で，班，クラス，委員会，生徒会，部活動等の集団に属することによって，集団の意義を理解し，自己の果たすべき役割と責任を学ぶことは大切である。規律を守り，成員相互の理解を深めながら，利己心や狭い仲間意識を克服することを学ぶことも，またこの時期には大切なことである。そして，他者との協力によって，その集団の目指す価値を実現することの難しさや大切さ，さらには，その喜びを体験すべき時期でもある。反対に，集団の向上にとってマイナスとなる行動とはどのような行動のことをいうのかについて学んでおくことも大切である。

そこで，集団における自己の果たすべき役割と責任を認識し，心の中に潜む自己本位の考え方を謙虚に反省し，一人よがりの行動を自制することによって，集団生活が向上することに気付かせるとともに，それが自己の人生の充実にもつながることを理解させたい。

④　ねらい

集団における役割と責任を果たし，集団生活の向上を目指そうとする意欲を育てる。

⑤ 指導過程

| | 学習活動及び主な発問 | 予想される生徒の反応 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|
| 導入 | 1. 地図帳によって北極海を探し，気候を調べる。<br>①ここで探検船が遭難したらどうなるだろう。 | ◦氷雪気候の厳しさを想起する。<br>◦船を失い流氷上に取り残された100余名の人々の気持ちを考える。 | ◦生徒に本時のねらいを意識させない。 |
| 展開 | 2. 資料を読んで考える。<br>②「最大のばつ」とは何だろう。<br><br>3. 資料の後半を読んで考える。<br>③真っ先に帰ってもらうことがなぜ最大のばつなのか。 | ◦状況を思い浮かべる。<br>・重労働をさせる。<br>・食事を抜く。<br>・追放する。<br>・最後まで帰さない。<br><br>・仲間として認められないことほどつらいことはないから。<br>・皆と最後まで苦しみを分け合うことができないから。 | ◦授業者が朗読しながら，状況に関する解説を加える。<br>◦班で話合いができるように，班ごとに机をまとめさせる。<br><br>◦話合いの中で出た意見をまとめさせ，すべての班に発表させる。<br>◦発表内容を整理しながら板書する。 |
| 終末 | 4. 本時の授業を通して感じたこと，考えたことをカードに自由に記述する。 | ・ばつを与えることが大切なことなのではない。<br>・集団の一員であることを自覚した。 | ◦机を元の位置に戻させ，カードを配布する。 |

⑥ 評価

・きまりを破った人への「きみょうなばつ」の意味が理解できたか。

・自分の問題として考えを深めることができたか。

・指導方法や発問，板書は適切であったか。

⑦ 生徒の感想カードから

・「最大のばつ」と聞いたら，普通は体罰などを思い浮かべてしまいます。でもこの場合，それよりも，仲間と一緒に帰らせてもらえないことの方がよほどつらいと，私も思います。皆で苦しんで，皆で助かることが大切なのに，そのためには皆が協力することが必要なのに，「先に一人で帰れ。」と言われることは，皆に集団の一員として認めてもらえないことだと思うからです。これからまだ文化祭などの行事がありますが，クラスの仲間として，ひとりよがりな行動をしたりせず，精一杯努力したいと思います。そして，この船の人たちが皆無事であったように，皆で「よかったね。」と言える行事を作り上げて行きたいです。　（女子）

・集団の中で，辛い経験を通して協力することで，その辛さを乗り越えることは，大きな喜びと安定を得ることができる。集団の中の皆はそれを信じ団結してきたと思う。この話で，協力できなかった人も，ある意味では自分の任務を遂行し，皆の役に立ちたいと思っていたと思う。しかし，協力すべき点でしないのはいけないことだと思う。真っ先に帰されることは，皆と共に喜びを味わうことができない。本当に「きみょうなばつ」だ。　（男子）

⑧ 考察

本授業を通じて，集団生活に対する思考の深まりの度合いを段階で表すと次のようになると考えられる。

(ア) 乗組員の集団におけるひとりよがりの行動に対する「最大のばつ」の内容に感心するだけで終わる段階。

(イ) ひとりよがりの行動が乗組員の集団生活に与える影響と，その行動の意味や背景まで考える段階。

(ウ) 乗組員の集団を自らの所属する集団と置き換え，成員のとるべき行動，協力の大切さ，役割と責任の意味について考える段階。

この視点から生徒の感想カードを分類すると，上記⑦の感想に見られるように(ウ)の段階で集団生活をとらえることができる生徒が多かったことは，授業のねらいとするところがある程度達成できたと考える。こうして深まった考え方を道徳的実践力として定着させ，どこまで実践に結びつけることができるかが，今後の課題である。

## 3. まとめ

第2分科会では，内容項目4－(1)「自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め役割と責任を自覚し，協力し合って集団生活の向上に努める。」について研究を進めてきた。

中学生の時期は，所属する集団の数や規模が拡大してくるときであり，集団の意義や，一人一人の役割と責任，相互の協力が問われるときである。また，そうした集団生活に参加することによって，一人一人が人間的な成長を遂げるときでもある。

自我の発達により自己の内省や探究が深まるこの時期は，同様の価値観を持つ仲間集団への帰属意識が高まる一方，異なる価値観を持つ者や集団に対しては，最初から無用な対立を避けたり，排他的な態度をとることも見られる。

成員が相互に協力することで集団の向上を目指そうとする本項目の指導において，この時期の中学生の集団に対する意識と実態をとらえるために，アンケートによる調査を行った。調査の結果から，生徒は発達段階に応じた経験を通して集団の意義を認識していることや，成長に伴ってより厳しい自己評価を行っていることもわかる。また，調査の結果と観察を重ね合わせることによって観念的には集団における自己の役割や責任を理解しても，周囲の目を気にして実践できない実態があることも推察される。

このような調査結果から，各学年の指導のねらいを定め資料の選定をした。資料の選定にあたっては，生徒の身近な集団を扱ったものや，生徒の生活実態からは離れていても，人間としての生き方を深く考えることのできるものを取り上げることにした。この資料を通して成員の相互理解を図り，協力し合って役割や責任を果たし，主体的な実践に結びつくような道徳的実践力を身につけさせるため，指導の方法について授業を通して深めた。

中学生の時期は，学校生活においても学級・委員会・部活動など様々な集団生活の場があり，各種の行事にも協力を必要とする場面がある。指導に当たっては，これらの活動を生かしながら，集団に応じて自己の役割と責任を果たし，協力し合って集団生活の向上に努める生徒の育成を目指し，より広範囲な社会で生活する際の主体的に生きる力を育てることが望ましい。

また，この項目の指導においては，集団と個人が対立するものではなく，集団の向上と個人の成長が補い合うものであることに留意したい。さらに「自己の向上」や「個性の伸長」を主題とした1－(5)の項目や，「自主自律」を掲げた1－(3)の項目，「他に学ぶ広い心」を主題とした2－(5)の項目とも伴せて考える必要を感じた。

## Ⅳ　まとめと今後の課題

これからの学校では，激しい社会の変化に主体的に対応し，心豊かに生きる人間の育成が重要な課題となっている。中学生という時期は主体的な自我の確立を求め，自己の生き方への関心が高まってくる。その関心に応え，生涯学習の基礎づくりに向けて，人間としての生き方への自覚を深め，道徳的実践力を高めるというねらいを持つ道徳の時間が担う役割は大きい。

本年度は，第１分科会が２－(5)「個性や立場の尊重・他に学ぶ広い心」を，第２分科会は４－(1)「集団生活での役割と協力・集団生活の向上」を取り上げた。そしてそれぞれ研究主題の明確化に努め，道徳の時間の充実を目指して研究を進めてきた。具体的には，ねらいとする価値についての主題を構想するとともに，資料の収集・選定と活用の工夫を行った。また生徒の実態把握に努め，授業研究を通して生徒の実態に即した授業の在り方について研究を進めた。

本研究では，２－(5)は主として個と個の関係を，４－(1)は集団倫理を内容としているが，両者とも集団の中での自分と他の人々とのかかわりを通して，人間としての生き方やよりよい人間関係を求めていくという点で共通している。これを起点として，各分科会では内容項目のとらえ方について深く検討を加え，結果を構造図として表わした。

実態調査では，各研究員の所属校でアンケート調査を実施し，その集計結果に考察を加え，各学年の指導のねらいとしてまとめた。資料選定に当たっては，内容項目の指導にふさわしいもの，生徒の実態に即したもの，または異なる角度から多面的な物の見方を導き出せるものなどの観点から資料を収集した。その過程で研究員による幾編かの自作資料が創作された。

道徳の授業では，生徒自らが課題を自分の問題として深くとらえ，好ましい道徳的価値観を形成し，よりよい人生を切り開くための意識付けとなることを意図した。授業研究と資料活用を通して私達は，道徳の時間が教師と生徒との日常生活における好ましい人間関係が前提となり成立するということを改めて認識した。また資料選定の難しさとともに，授業は，教師による生徒理解の大切さや内容項目を深くとらえることが重要な要素であることを学んだ。さらに，生徒一人一人に道徳的価値を自らの成長にとって大切なものとして深く自覚させるためには，教師は共に考えて行く援助者であるという認識が大切であるということを学んだことも収穫の一つであった。道徳の時間の指導によって生徒が道徳的価値観を形成し，人格の内面的充実を図ることはもとより，学校の全教育活動を通して行われる道徳教育によっても道徳的実践力が高められていくことは言うまでもない。今後は，学校教育全体を通して行う道徳教育の充実と共に，人間としてのよりよい生き方を深める道徳の時間の指導の工夫についてもさらに研究を重ねていきたい。